

## 平成 28 年度 自然保護常任研修会

日本山岳協会自然保護委員会

**会期** 平成 28 年 6 月 18 日～19 日（1 泊 2 日）

**場所** 山梨県河口湖町 三つ峠山荘

**参加** 36 名（栃木 6、埼玉 8、千葉 1、東京 7、神奈川 3、長野 4、山梨 7）

**概要** 坂口三郎日山協顧問のほか、常任委員、常任委員出身岳連自然保護委員が集い、「希少種の保護と現状」を主題に、講師に三つ峠山荘主人の中村光吉氏を訪ね、実地を踏まえた研修を行った。今回の実施に当たっては、山梨県山岳連盟自然保護委員会の全面的サポートにより行った。

当日、幸運にも梅雨の晴れ間に当たって、富士山を眼前にした風光明媚な三つ峠の自然を教室に、第一日目はレクチャー、第二日目はフィールドで実地研修となった。

**第一日目のレクチャー**では、前半を中村氏による富士山の歴史に始まり、三つ峠地区の植生保護の状況や問題などビデオを交えての説明、後半を山梨岳連の磯野澄也自然保護委員長から「めだかの学校」活動（児童など幼年登山の支援）や山梨岳連の自然保護状況を説明。

講演のあと、坂口三郎日本山岳協会顧問の発声で挨拶と乾杯が行われ、各自が手持ち上げた酒杯で懇親を深めた。

### （中村光吉氏のレクチャー概要）

三つ峠からは海が見える時期があった。富士山の原型が出現したのは、今から 2～300 万年前、その前の富士山周辺はまだ海の底で、太平洋の波が御坂山塊の裾にせまって、東に丹沢山地、西に天子・赤石山地が連なっていたようだ。その証拠にここの岩場で採取した貝の化石をお目に掛ける。要はこの地域は古くから陸地として存在して、それなりの生態系を築いてきた。アツモリソウをはじめとするラン科植物は 8000 万年もの長い歴史を持つ花である。この地はラン科植物のアツモリソウの自生地として広く知られている。嘗て、登山道脇にたくさん見られたといわれているが、盗掘（盗採）などの憂き目に遭い、ここ 50～60 年で大きな危機を迎えている。

山梨県では「山梨県高山植物の保護に関する条例」を 1986 年 4 月 1 日から施行し、キタダケソウ、アツモリソウなど 22 種を特定高山植物に指定。また、1994 年以降に国法（種の保存法）による希少種にキタダケソウ、アツモリソウ、ホテイアツモリが指定され、採取、譲渡が全面的に禁止となった（希少種の指定はその後数を増やし現在では 11 種）。山梨県は希少植物保護の先進県である。

また、踏みつけやシカの摂食圧による生態系のバランスが崩れから、ササやテンニンソウ、それにヤマドリゼンマイがテリトリーを侵害して増え、アツモリソウにとっての脅威となっている。また、カラマツなど周囲の樹林が旺盛となり、アツモリソウにとって日照不足による生育の障害を引き起こしている。

アツモリソウは土壌中のラン菌と共生しており、空気層が富んだ「フカフカ」なラン菌が好む土地が即、アツモリソウ生育圏となっている。またアツモリソウの種子は微小で内部に養分の蓄えが無く、ラン菌の助けを借りこれが地中で 10 年もの長時間を掛けて実生として初めて地上に姿を現すとされる。荒れた土地柄になってしまうと、アツモリソウの増殖や成長、さらに花を咲かせるために必須であるラン菌の活性が大きく低下してしまう事態を引き起こし、花は咲かなくなってしまうのである。

三つ峠では、行政や地権者の許可をもらい全国に先駆けていち早く防護柵を設置して鹿の食害から山を守って来た。さらには積極的に植生を取り戻す取り組みも行われており、テンニンソウや笹を取り除く作業にボランティアを募って行っている。

**第 2 日目**、山梨岳連 古屋寿隆会長の挨拶のあと、中村光吉氏の案内でフィールドスタディーが行われ、自生の様子、土壌の様子、立地条件、テンニンソウやヤマドリゼンマイの寡占化の状況を視察した。2 時間ほどの視察のあと、実際にテンニンソウの除草作業を行い汗を流した。

除草作業後、山梨県自然保護委員の吉野泰弘氏から保護の行き届いている三ツ峠のカモメランと無法地帯になっている別の山のカモメランでは大きな違いが出てきていること、保護のために自主的にロープ設置などの作業を行っており、もはや待った無しの状態に陥っていることなど。さらに最近楡形山で発見された希少植物の保護の取り組みを解説を拝聴し、フィールドスタディーを締めくくった。



三ツ峠山荘の玄関先広場でレクチャー



ビデオでアツモリソウの保護について説明



ヤマドリゼンマイの寡占化を説明する中村氏



テンニンソウの除草作業を実地体験



植生解説をする山梨岳連のスタッフ



三ツ峠山荘前にて参加のメンバー達